

梅棹忠夫の文章はなぜ明快なのか

大 島 中 正

1. はじめに

梅棹忠夫の文章は、つとに高く評価されている。明快である、平明にして達意の文章であると評価されている。しかし、なぜ明快なのか。その文章表現を分析し考察した論考は、管見では皆無にひとしいといわざるをえない。この論文は、梅棹忠夫の文章表現について、日本語学のことばによるスケッチをこころみようとするものである。

渡辺実（1981：238）は、「書かれた文章が、それを書いた作者のすべてである。どういう言葉を組み合わせ、どこで文を切り、次に何を書き継ぐか、そういう具体的な言語の行為が、作者により作品によって異なり、創り出される意味が決定的に別ものになるという、至極あたり前のことが興味をそそる」と、『平安朝文章史』の「跋」にしている。

この論文では、まず、梅棹忠夫の文章に対する評価の主たるものを紹介し、次に梅棹忠夫の文章を研究することの意義をかながえた。さらに、渡辺実（1981：238）のことばにみちびかれて、梅棹忠夫が「どういう言葉を組み合わせ」ているか、また「どこで文を切り、次に何を書き継ぎ」いでいるかを観察した。その結果、次の(1)～(3)を指摘した。これらは、いずれも作業仮説である。

- (1) 問題にしている事の本質をあきらかにし、それを印象ぶかくよみ手につたえるために、あたらしい合成語・あたらしい語結合をつくりだしている。
- (2) 重要な情報はやく提示するために、従属文を適宜もちいている。
- (3) かき手のいわんとするところを理解するための時間をよみ手にあたえるために、おなじ趣旨のセンテンスをかさねて使用している。

2. 梅棹忠夫の文章はたかく評価されている

梅棹忠夫の文章を評価したものとして、ここでは、谷沢永一（2001）・柴田武（1993）・桑原武夫（1980）のことばを紹介する。

谷沢永一は、『日本語学』の2001年1月号によせたエッセイ「新世紀の日本語をかんがえる」において、(4)のように、二十一世紀において範例とすべき文章というたかい評価を梅棹忠夫の文章にあたえている。

- (4) 二十一世紀において日本語による文章の範例とすべきは、殆どただひとり、梅棹忠夫であろう。彼の学説が正鵠を射ている功は言うまでもないが、それに加えて、われわれ現代人は彼の文章に深く学ばねばならないと思う。我が国における短しとせぬ論説史上、彼ほど平易にして達意の表現を提示した者は他に見当らない。敢えて再び言う。二十一世紀における日本語の文章は、梅棹忠夫を見習う努力から始めなければならない。『梅棹忠夫著作集』全二二巻別巻一卷（中央公論社）は、新しい日本語表現の先達である。

（谷沢永一（2001）， p. 29）

柴田武は、高等学校の国語教科書の編集委員会に、梅棹忠夫の『モゴール族探検記』（1956年、岩波新書（青版）253）の一節を、教科書に掲載する作品の候補として推薦した際のことを(5)のようにのべている。

- (5) 委員会では簡単に不採用になった。理由は、文章がやさしすぎて、教室で指導の余地がない。二時間、三時間かけて説明するほどの内容がない。

梅棹氏の文章だから実にやさしい。明快でもある。だからこそ、私は推したのだった。「やさしすぎる」という不合格理由は、実は、三十年後の今日まで尾を引いていて、事あるごとに考え込むきっかけになっている。

（柴田武（1993）， p. 4）

後に、梅棹忠夫の文章は、国語教科書に掲載されることになるが、国語科の教師たちにどのように評価され、どのような指導がなされたのであろうか。興味ぶかい事柄であるが、わたくしは、不明にしてしらない。

桑原武夫は、その著『文章読本』（1980年、pp. 55-65、潮出版社）において、「文明の生歴史観」の冒頭を「パンチをきかせて書く」という一節の範例文として紹介し、「この文章は、漢字の使い方、句読点のつけ方が実にうまく配慮されています。文章を書くうえで参考になるだろうと思います。マシだとかダメだとか、そういう俗語をほうりこんで調子をつけていく。そういうところの呼吸も、よく吟味していただきたいと思います。（桑原武夫（1980：65））」ということばでしめくくっている。梅棹の文字づかい・ことばづかいについて注目すべき点が具体的に指摘されているのである。

3. 梅棹忠夫の文章を研究することにどんな意義があるか

さて、梅棹忠夫（1920年—2010年）とは、何者であったのか。梅棹の没後に開催された「ウメサオタダオ展」（主催：国立民族学博物館、開催期間：2011年3月10日—6月14日）の実行委員長・小長谷有紀は、梅棹の名語録『梅棹忠夫のことば』2011年、河出書房新社）を編纂した。その「はじめに」において、(6)のように梅棹を簡潔にかたっている。

- (6) 知の巨人・梅棹忠夫は、家庭からユーラシア大陸まで、さらには地球全体にわたって、綿密に調査し、未来を探索した。そんなかれのことばは、先駆的であり、しかも平易でわかりやすく、いつも人びとをおどろかせた。

（小長谷有紀（2011），p.1）

ここにも、そのことばの平易さ・わかりやすさが指摘されている。梅棹の著作をよんだことのなかった者でも、この『梅棹忠夫のことば』を一読すれば、おそらくだれもがそのことばのやさしさ・わかりやすさを実感することであろう。

それでは、梅棹忠夫の文章を日本語学の言語資料とする意義はどこにあるのか。わたくしは、次の(7)と(8)を指摘したい。

- (7) 著作・講演・対談が豊富にあること。

- (8) 現代日本語のことばと文字に対して自覚的であること。

梅棹忠夫は、長期間にわたって多数の著作をのこし、多数の講演・対談をおこなってきた。『ウメサオタダオ展』の目録に掲載されている「梅棹忠夫のおもな著作（pp.141-143）」によれば、最初の著作「白頭山をこえて満州へ」の発表が1940年、『梅棹忠夫語る』（日本経済新聞出版社）の刊行が没年の2010年である。70年にわたる活動である。『梅棹忠夫著作集』全22巻別巻1巻（中央公論社）に代表される諸文献には、その発表の経緯等について、著者自身が詳細な解説をおこなっている。同著作集（以下、著作集と略称）には、また、識者によるコメントがつけられている。著作集の別巻は詳細な年譜・目次・索引であり、別に著作目録も作成されている。要するに梅棹忠夫は、質・量ともに充実した言語資料をのこしたということである。

著作集に付された識者によるコメントは、梅棹忠夫研究の論文といってもよいほどである。しかし、その多数のコメントの中にも、梅棹のことばづかいや文字づかいについて、日本語学的な調査・分析をふまえたものはみあたらない。

梅棹忠夫は、日本語の文字・表記をはじめとして、言語についても質・量ともに充実した著作をのこした。その主たる論説は、著作集の第18巻と第20巻によってしていることが

できる。前者は『日本語と文明』で、庄司博史「実践論としての日本語論」と高橋太郎「梅棹忠夫と国語問題」とがコメントとして掲載されている。後者は『世界体験』で、江口一久「地球をあるくエスペランチスト」と小林茂「梅棹忠夫における世界体験の方法」とがコメントとして掲載されている。後者に収録の「実戦・世界言語紀行」において、梅棹は「わたしはいま両眼の視力をうしなっているから、よみかきはできない。音声言語だけがたよりである。目のみえているひとは漢字をみているから、平気で同音異義語やむづかしい、ききなれない漢語をつかう。盲人にとっては、これははなはだきびしい状況である。近代日本語は明治以後もまったくの野ばなしで展開してきたから、盲人のことなどは眼中になかったのである。(註：下線は大島による。以下おなじ。)盲人も日本人の一部である。盲人もふくめて、日本人にきいてわかる日本語にすることができないであろうか。ちなみに、盲人用の点字は完全な表音文字である。日本語を表音化することは、けっしてできないことではないのだ。(著作集20, p.642)」という。この部分は、特に内容・表現ともにおもく、印象ぶかい。

梅棹は、盲人になる以前から日本語の表音化を主張していた。梅棹には、日本語をローマ字で表記することによって「わたしの文章は、文体からしてすっかりかわってしまうことになった(著作集11, p.105)」という経験があるのである。著作集11に収録の「知的生産の技術」から、その主要な部分を引用しておこう。

- (9) 第一に、ことばえらびが慎重になった。ローマ字は表音文字だから、むづかしい漢語をたくさんつかうと、意味が通じにくくなる。そこで、なるだけ耳できいてわかることばをつかうようになる。その結果、わたしの文章は、文体からして、すっかりかわってしまうことになった。石川啄木がローマ字の日記をつけていたのは有名である。岩波書店版の「啄木全集」にその全部が収録されているが、簡潔で迫力ある文章である。桑原武夫先生によると、啄木の文章は、このローマ字日記以後、ひじょうによくなった、ということである。しばらくでも、日本語のローマ字がきを実行することは、たしかに文章の訓練として、たいへん有効にちがいないと、わたしは信じている。

(著作集 p.105)

梅棹は、日本語という言語によって明快な表現をすることに対して自覚的であり、意欲的でもあった。特にその表記のありかたには、たいへん批判的であった。そういう人物のことばづかい・文字づかいがどういうものであるのか。日本語学のメスをいれてみたいところである。啄木や梅棹におこった文体上の変化は、ローマ字体験が真の原因であるのかどうか。これは、文字と言語表現にどういう関係があるのかというおおきな問題

である。この問題にとりくむためには、ローマ字体験以前の文章とローマ字体験以後の文章との比較が必要である。十分な資料がえられるかどうか、現時点では不明である。梅棹によるローマ字専用のワカチガキ文は、資料の入手が可能であるかもしれない。

先に、梅棹の文章が国語科の教員たちにどう評価されたのかは、興味ぶかい事柄だと
いった。次の(10)は、京都国語サークルの「三分野説」に関する安永武人の論文（1969：
pp. 31-32）からの引用である。

- (10) 漢字には、視覚にうったえ、直感的に意味をうけとらせるという便利さと、二つの漢字をかさねることによって、あたらしい概念をつくりだせるという便利さ
とがあることは認められます。しかし、漢語・漢字の多用が、かならずしも文章
としての精密・明晰な論理の展開を保証していないというのが、生徒・学生の実
情であるといわねばなりません。むしろ、漢語・漢字の多用が、論理ひいては思
想をあまいものにしていて、文章を書いている本人が、かならずしもわかって
書いているとはかぎらないという奇妙な文章さえできています。ことばをつか
うのではなしに、ことばにあやつられるという現象がたしかにあるといえましょ
う。そのことが、論理を明晰にし思想を明確にする——つまり自分自身の論理や
思想が血肉化しているかどうかをたしかめることを怠らせていると思います。そ
ういう観点にたちますと、漢字制限というのが、児童・生徒の記憶負担をかるく
するという問題とともに、論理や思想の明晰さを獲得するためにも役立っている
といわねばなりません。したがって、こんどの改訂指導要領で、必須漢字を八八
一字から九九六字にふやしているという問題は、これらの観点からも批判されね
ばならないでしょう。ここでいいたいの、文字指導が正確に書くという段階を
こえて、たとえば、漢字を教師が意図的に制限して文章表現をさせる、さらには
「かな」文字だけによる文章表現、ローマ字による文章表現の段階にまですすむ
べきだということです。石川啄木がローマ字日記を書いたのは、家族にたいして
秘匿する意味もあったようですが、結果的には、かれの思想が非常に明晰なもの
になったという実例とされています。

1961年に京都国語サークルが提唱した国語科構造論である三分野説（言語教育・文学教育・作文教育）の中の「言語教育」についての提案の一部分である。言語教育の究極の目標は、「論理的な認識力・思考力・批判力の育成（安永武人（1969：30）」）であるという。それを実現するために、言語教育の基礎構造として「言語表記（文字指導）」「概念の形成（語い指導）」「法則的な把握（文法指導）」の三本の柱がたてられている。これは、そのうちの一本である「言語表記」についての提案である。現在、三分野説がどの

ように継承されているのかは不明にしてしまいが、文字と言語表現の関係、明快な言語表現とその根底にある論理・思想の明晰さとの関係に着目した、示唆にとむ提案である。梅棹の文章が三分野説の立場からどのような評価をうけているのであろうか。明快な文章のモデルになる教材としてあつかわれているのであろうか。これもまた、わたくしは、情報をもっていない。ぜひともしりたいところである。

梅棹忠夫の文章が明快であるのも、三分野説が目標の一つとしている「論理的な認識力・思考力・批判力」において、梅棹が群をぬいてすぐれているからであろう。言語表記にもちいる文字の種類と文体との関係。これは、魅力的な研究課題であるようにおもえる。しかし、今回は、梅棹忠夫の文字づかいについてはとりあげないことにする。まずは、そのことばづかいをとらえる着眼点を具体的に指摘したいとかがえる。文字づかいとことばづかいとの関係はその次の段階でかंगाえたい。

4. どういうことばをくみあわせているか

「文明の生態史観」「知的生産の技術」「裏がえしの自伝」。これらはいずれも梅棹忠夫の著作のタイトルであるが、同時に梅棹がつくりだしたがことばでもある。ここでは、「文化開発」「利用民」「純情地帯」といった合成語と「心の足し」という語結合をとりあげることにする。いずれも梅棹がつくりだしたとかがえられるものである。

次の(11)~(14)をみると、どのような共通点を指摘することができるのであろうか。下線部を中心によみくらべてみよう。

- (11) わたしたちの研究会では構想的文化的側面について案をねることになった。埋蔵文化財と土地開発の関係にみられるように、もともと文化と開発とはあい反する概念であるとされることがおおい。開発は文化の破壊をとめない、文化は開発を拒否するものである。しかし、かंगाえてみると、文化あるいは文化的施設を創出することは、すなわち開発ではないのか。わたしたちはこの研究会において、「文化開発」という語をもちいはじめた。この語がもちいられるようになったのは、これが最初だったのであろう。

(著作集21, p.9)

- (12) 都市の人間というものは、いまや「居住民」から「利用民」へと変化しつつあるのだ、ということです。「利用民」というのは妙なことばですが、そこに居住はしていないけれど、そこを利用し、生活している人たちです。都市のドーナツ化現象というようなことも、この利用民の増加ということです。そのような利用民の立場からいえば、都市というものは、いわばファシリティーズつまり施設の

集合体である。一種の便益集合体である。都市行政の問題は、それらのファシリテーズをいかにうまく運営するかという問題だ、ということになります。だれのためのファシリテーズかという、かならずしもその地域の居住民のためでなく、利用民一般、あるいはひろく世界のためだ、ということなのです。

(著作集21, p. 143)

「純情地帯」「すれっからし地帯」

- (13) かつて、わたしは宗教の純情地帯ということをもうしました。宗教の文明史において、ふたつの地域が区別できます。ひとつはふるくから巨大文明が発生して、人間の精神のふかいところまでがたがやされており、固有の宗教もかなりの程度体系化されていた地域です。もうひとつは、巨大文明の辺境にあり、精神がふかいところまではたがやされておらず、固有の宗教も体系化していない地域であります。前者を宗教の「すれっからし地帯」、後者を「純情地帯」と名づけたのであります。この純情地帯に、前者の異端として発生した体系化された大宗教がはいつてきますと、たちまちのうちに圧倒され、まきこまれてしまい、その大宗教の信者になってしまいます。

(『近代世界における日本文明—比較文明学序説』, p. 323)

- (14) 人類史のながいながれのなかで、一番はじめにでてくるいとなみは「腹の足し」になることです。そこで、農業をやり家畜を飼う。二番目にでてくるのが「体の足し」になること、つまり、体がらくになる。あるいてゆくところを電車でゆくとか自動車でゆくとか、エネルギーの足しになることをやる。これがつまり工業化ということです。三番目にでてくるのが「心の足し」。これが文化という概念でとらえようとしているものでしょう。

(著作集21, p. 138)

(11)~(14)のいずれにも指摘できることは、そこに対比的思考がおこなわれているということである。(11)では、「文化」と「開発」とがたがいに反する概念であることを確認したうえで、両者をむすびつけている。(12)の「利用民」は、既存の「居住民」と対比させてこそ明確になる概念である。この新造語の「利用民」によって、読者は、「居住はしていないけれど都市を利用し生活している人たち」という概念をしることになる。(13)(14)も同様に対比的に事柄がとらえられているが、(11)(12)とはちがって、これらには、類比的思考が同時におこなわれているとかがえられる。類比的思考とは要するに比喩のことであるといつてよからうが、「対比的思考」にあわせて「類比的思考」といいあらわすほうがよからう。(13)はいわゆる擬人法である。(14)は「腹の足し」からの類比によって

「体の足し」「心の足し」がつくられたのだろうが、三者を対比的に表現することによって読者への説得力がますのである。いずれも問題にしている事の本質をあきらかにし、事の本質を印象ぶかくよみ手につたえ、かつ説得するために、つくりだされたものであるとかんがえられよう。

なお、ここで使用した「対比的」「類比的」というのは、梅島忠夫（1980：pp. 89-96）を参考にした。

5. どこで文をきり、次に何をかきついでいるか

ここでは、文章・談話を構成する文（＝センテンス）に注目してみよう。梅棹の文章には従属文が適宜使用されている。それは、かき手が重要と判断した情報をよりはやく提示するためであろう。従属文とは何か。従属節ではない。従属文とペアになる用語は独立文である。これらは野田尚史の用語である。野田尚史（1996：30）は「昔、あの島のあたりに人魚がいた。そんな話があるそうだ。」という2文の連続したものを例として説明をしている。最初の文である「昔、あの島あたりに人魚がいた。」が従属文であり、つづく「そんな話があるそうだ。」が独立文である。この2文は、「昔、あの島のあたりに人魚がいた」という話が「そんな話があるそうだ。」という1つの文に表現しなおすことができる。要するに従属文とは、ほかの文、すなわち独立文に従属している、従属節のような文のことである。野田尚史（2002）は、従属文のことを「子文」、独立文のことを「親文」ともよんでいる。

梅棹忠夫の文章から、「先に従属文後に独立文」というパターンを例示してみよう。

- (15) ①博物館は、情報機関であります。②それぞれの分野に応じて、ひろく情報を収集し、蓄積し、変換し、創造し、伝達する。③そういう機関であります。④そして、集積された膨大な情報のなかから、最新の正確な知識を市民に提供する、これが博物館の仕事であります。⑤しかし、そもそもなんのために知識・情報を提供するのかといえば、市民に、未来の人間生活を構築するために、あやまりのない世界像を形成する材料を提供することだ、とってよろしいかとおもいます。⑥わた子ども国立民族学博物館に即して即していえば、世界の人類文化の多様性の認識にもとづいて、二一世紀の人類の生きかたにおもいをはせる、というのがねらいであります。

（著作集14, p. 496）

(15)においては、②③が典型的な例である。②が従属文で③が独立文である。②と③をあわせて「それぞれの分野に応じて、ひろく情報を収集し、集積し、変換し、創造し、

伝達する機関であります。」という一つの文にすることができる。もっとも、①の主題部「博物館は」は、②③の主題部でもある。いわゆる「～はのピリオド越え」である。だから、①②③をあわせて「博物館は、それぞれの分野に応じて、ひろく情報を収集し、蓄積し、変換し、創造し、伝達する、情報機関であります。」と表現することも可能なのである。しかし、梅棹は、あえて一塊の内容を①②③にわけて表現したのであろう。まず最初に①をいう。この①がもっともいわなければならないことである。そして、①の「情報機関」の説明を次におこなう。しかし、その説明がながくなるので、②という従属文(=子文)を提示し、③という独立文(=親文)が②をうけておさめるといふ順序に構成したのであろう。そうすると、②と③が子文親文という関係であるばかりでなく、①が②③という親子文に対する親文であるということになるとかんがえられよう。次の(16)はどうだろうか。

- (16) ①じつは、国際交流の研究というのも、まさにそのような未来学の一分野としておこなうべきだと、わたしはかんがえているのでございます。②国際関係の未来について、まず徹底的な分析をやる。③先をよむわけです。④そして、そのなかでどのようにして有効な国際交流をすすめてゆくか、それについて、さまざまな戦略論をつくって、それを検討する。⑤戦略論ということばは、こういう問題にそぐわない、ややぶっそうな印象をあたえますが、この場合はいわば平和の戦略であります。⑥われわれの文化、および相手の国の文化の特質を徹底的に研究する。⑦そのなかから相互理解のための障害になる問題点を全部あらいだしてみる。⑧そして、それを克服するために可能な方策をかんがえる。⑨さらに、その方策を実施した場合におこる変化を予測する。⑩いわば国際交流の未来ストーリーをかいてゆくわけでございます。

(著作集13, p.547)

(16)の④に注目したい。これは、いうまでもなく、一つのセンテンスである。しかし、このセンテンスは、2つめの「,」を「。」にかえることができるのではないだろうか。すなわち、「そして、そのなかでどのようにして有効な国際交流をすすめてゆくか。」という子文と「それについて、さまざまな戦略論をつくって、それを検討する。」という親文にわけることができるということである。みかけは一つの文であるが、実質的には、子文・親文という2文の連続といつてよいであろう。

独立文(=親文)ばかりをもちいるのではなく、適宜、従属文(=子文)をもちいることで、一文がみじかくなり、その構造が比較的単純ともなる。しかも、より重要と判断された情報がはやく提示される。親子文の使用は、明快な文章にとってかかすこ

とができないものであるとかがえられよう。

次に、親子文との対比で、また、類比的思考によって「同胞文」とでもよぶべきタイプがあることを指摘しておきたい。要するに、おなじ趣旨のセンテンスをかさねて使用するこゝである。次の(17)をみてみよう。

- (17) ①国際交流とは、ピースミール（なしくずし）の戦争なのです。②ひとりひとりの心のなかでの、異文化との武器なきたたかいです。③よその文化を理解するというのは、ことなる価値体系をみとめるということですから、もともと不愉快なことです。④それは心のなかで矛盾をのりこえるという、じつにつらい作業なのです。⑤たがいの文化への理解がじゅうぶんであれば、ほんとうの戦争はおきようがありません。⑥つまり、文化は、攻撃をはじめからやめさせるもっとも効果のよい武装です。⑦いいかえれば、国際交流とは安全保障の不可欠の一部であるというわけです。

（著作集13, p. 601）

(17)において、⑦の最初の「いいかえれば」が明示しているように⑥と⑦は、同じ趣旨の反復なのである。同趣旨かどうかの判断は微妙で困難なこともあろうが、ムダといえはムダな表現をあえておこなうことに意味があるのであろう。それは、おそらく、かき手のいわんとすることを理解する時間、咀嚼する時間をよみ手にあたえようと意図されたものではないだろうか。次の(18)には、反復ではなくて、表現の修正、ねりなおしともいべきパターンがみられる。

- (18) ①情報の時代というのは、腕力にかわって知力の時代だ。②知力という点では、男女はまず差がない。③すくなくとも、腕力の差よりはるかにちいさい。④というより、知力の差は性による差よりも、個人差のほうがはるかにおおきいのである。

（著作集9, p. 151）

②から③へ、そして④へと読者はよみすすむ。要点は④である。②、③はムダといえはムダである。しかし、このムダに意味があるのではないだろうか。読者は筆者の思索のあとをなぞっていくことによって、筆者の趣旨をより正確に理解することになるのであろう。

6. おわりに

梅棹忠夫の文章はなぜ明快なのか。この問題に対するここでの解答は、すでに本稿の冒頭で提示した。次の(1)～(3)である。

- (1) 問題にしている事の本質をあきらかにし、それを印象ぶかくよみ手につたえるために、あたらしい合成語・あたらしい語結合をつくりだしている。
- (2) 重要な情報をはやく提示するために、従属文を適宜もちいている。
- (3) かき手のいわんとするところを理解するための時間をよみ手にあたえるために、おなじ趣旨のセンテンスをかさねて使用している。

これらは、現時点では、いずれも作業仮説にすぎない。いずれについても、膨大な量の言語資料がある。著作・講演・対談といった言語資料によって、あるいは、執筆・講演・対談がおこなわれた時期（端的に言えば梅棹の年齢）によって、さらには、そのテーマ・トピックによって、(1)~(3)に相違があるのか、それとも一貫性がたかいのか。いずれも、大量の言語資料から多数の実例を収集・整理して実証されなければならない。

ことばづかいだけではない。梅棹忠夫の文章を対象にする以上は、文字づかいについても研究が必要である。文字・表記の研究は、語彙との関係を中心におこなわねばなるまい。ローマ字だけで文章をかくことによって文体がかわるのか。これこそは、実に興味ぶかい、表記と語彙と表現に関する研究テーマである。

参考文献

- 梅棹忠夫（1969）：『知的生産の技術』，岩波新書（青版）722，岩波書店。
- 大島中正（2003）：『体言本位の表現と用言本位の表現——『やさしいことばで日本国憲法』を言語資料として——』，『同志社女子大学日本語日本文学』15，pp.29-38。
- 樺島忠夫（1980）：『文章構成法』，講談社。
- 桑原武夫（1980）：『文章作法』，潮出版社。
- 小長谷有紀（2011）『梅棹忠夫のことば』，河出書房新社。
- 柴田武（1992）：『情報化時代の文章』，『日本語学』11—4，pp.8-11，明治書院。
- 柴田武（1993）：『教科書の日本語』，『日本語学』12—2，pp.4-7，明治書院。
- 谷沢永一（2001）：『もっと平易にもっと達意に』，『日本語学』20—1，pp.28-29，明治書院。
- 野田尚史（1996）：『文の種類』，『日本語学』15—9，pp.22-31，明治書院。
- 野田尚史（2002）：『単文・複文とテキスト』，『日本語の文法4 複文と談話』，pp.3-62，岩波書店。
- 安永武人（1969）：『言語教育』試論』，京都教育センター編『季刊 教育運動』14，pp.29-35，法律文化社。
- 渡辺実（1981）：『平安朝文章史』，東京大学出版会。